

# 真理とは何か？ - その四

あなたの心を騒がせるな

Jeff Pippenger

2023-09-09

1798年、ミラー派の歴史の始まりに、ダニエル書にあるウライ川の幻の封印が解かれ、知識の増加がもたらされ、二種類の礼拝者を試し、明らかにした。ウライ川の幻は、黙示録2章と3章の七つの教会に象徴される、神の民のための内的メッセージを表している。1798年に始まった預言的歴史の終わりにあたる1844年8月12日から17日のエクセターのキャンプ集会において、ユダ族の獅子が隠されていた真理を覆っていた御手を取り払われたとき、真夜中の叫びのメッセージの封印が解かれ、知識の増加がもたらされ、二種類の礼拝者を試し、明らかにした。

1989年、ダニエル書11章40節に記されているとおり、旧ソ連を代表する諸国がローマ教皇制とアメリカ合衆国によって押し流されたとき、ダニエル書におけるヒデケル川の幻の封印が解かれ、知識の増大がもたらされ、それが礼拝者の二つの種類を試し、現れ出させた。ヒデケルの幻は、黙示録の七つの封印において示されているように、神の民の敵の外的メッセージを表している。1989年に始まった預言的歴史の終わりにあたり、2023年7月の最後の2週間ほどから、ユダ族の獅子は、隠された真理から御手を取り除くことによって、真夜中の叫びのメッセージの封印を解く働きを始められ、それにより知識の増大がもたらされ、神の民の間で礼拝者の二つの種類が試され、最終的には現れ出されることになる。

ヨハネによる福音書14章1節で、キリストは弟子たちに心を騒がせないようにと励ましている。

あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。ヨハネ 14:1

数時間のうちにキリストは逮捕され、ほどなくして十字架につけられ、葬られ、復活された。父なる神のもとに昇天された後、弟子たちのもとに戻って来られた。

彼らがこう話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立たれ、彼らに言われた。「あなたがたに平安があるように。」しかし彼らはおびえ、恐れ、霊を見たのだと思った。そこでイエスは彼らに言われた。「なぜ取り乱しているのか。なぜあなたがたの心に疑いが起こるのか。」ルカによる福音書 24:36-38

改革の過程における最初の失望は、神の民が先に示された真理を忘れるときに生じる。十字架という危機において彼らの恐れと失望があらわになるほんの一週間足らず前に、イエスが彼らに語っていたことを、弟子たちは忘れていた。最初の失望の後には待ちの時間が続き、それは十人の乙女のたとえでは花婿の不在によって表されている。イエスは、ご自分が父のもとに行くが、また戻って来ると、弟子たちに直接告げておられた。主が弟子たちに与えておられた予告は、彼らとその危機に圧倒されるのを防ぐことにはならなかった。十人の乙女のたとえの文脈では、危機とは品性が現れる場であって、そこで育てられ

ることではない。イエスは弟子たちを選び、任命しておられ、その危機の前にその事実を彼らに告げていた。

あなたがたがわたしを選んだのではない。むしろ、わたしがあなたがたを選び、任じた。あなたがたが出て行って実を結び、その実がいつまでも残るように。また、あなたがたがわたしの名によって父に願い求めることは何であれ、父がそれを与えてくださるように。ヨハネ 15:16

それでも、彼らは選ばれたにもかかわらず、危機に圧倒されるのを免れなかった。

品性は危機によって明らかになる。真夜中に「見よ、花婿が来る。出て行って迎えよ」と切なる声が告げられたとき、眠っていた乙女たちは眠りから目を覚まし、誰がその出来事に備えていたかがわかった。両者とも不意を突かれたが、一方は非常時に備えており、もう一方は備えがないことが明らかになった。品性は状況によって明らかになる。非常時は品性の真価を引き出す。思いがけない災厄、死別、危機、予期せぬ病や苦悶、魂を死と真正面から向き合わせるような出来事は、品性の内実を露わにする。神の言葉の約束に対する真の信仰があるかどうか明らかになる。魂が恵みによって支えられているか、すなわち、灯とともに持つ器に油があるかどうか明らかになる。

「試練の時はすべての人にやって来る。神による試みと精錬のただ中で、私たちはどのように振る舞うのか。私たちのともしびは消えてしまうのか。それともなお燃やし続けるのか。恵みとまことに満ちておられる方との交わりによって、私たちはあらゆる非常時に備えているだろうか。五人の賢いおとめたちは、自分たちの品性を五人の愚かなおとめたちに分け与えることはできなかった。品性は、私たち一人ひとりが形成しなければならない。」 Review and Herald, 1895年10月17日。

『ヨハネの黙示録』の冒頭の数節で示されている「イエス・キリストの啓示」は、教会への最後の警告のメッセージであり、その後には世界に向けられるものとなる。その啓示は、封じられた巻物を開くにふさわしい唯一の方として黙示録第5章で示されているユダ族の獅子によって、猶予期間の終わりの直前に封印が解かれる。

そして、長老のひとりが私に言った。「泣くな。見よ、ユダの部族の獅子、ダビデの根が、勝利を得て、巻物を開き、その七つの封印を解くことができる。」黙示録 5:5

ユダ族の獅子は「ダビデの根」であり、「ダビデの子」でもあり、またダビデの主でもある。ユダ族の獅子が象徴する関係は、ユダ族の獅子が真理に封印を施すときもそれを解くときも、イエスが「ダビデの根」として示しているように、物事の初めによってその終わりを示す「初出の原則」を用いて行われることを明らかにしている。終わりの時のある時に真理の封印が解かれると、ダニエル書12章に示されているように、浄化の過程が始まる。

その書の封印を解き、この終わりの時代に起こるべきことの啓示をヨハネに与えたのは、ユダ族の獅子であった。ダニエルは自分の受ける分に立って証しをなし、その証しは、第一の天使の使命がこの世界に宣べ伝えられる終わりの時まで封じられていた。これらの事柄はこの終わりの時代において限りなく重要である。しかし、「多くの者は清められ、白くされ、試みられる」一方で、「悪しき者は悪を行い、悪しき者のう

ちのだれも悟らない」. Manuscript Releases 第18巻、14、15.

ユダ族の獅子としてのイエスの働きは計り知れないほど重要であるが、「悪しき者のうち誰一人として悟ることはない」ので、彼の働きも封印が解かれたメッセージも彼らには理解できない。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

試練の過程は「清められ、白くされ、試される」という三つの段階で表されている。これら三つの段階は「永遠の福音」の三つの段階を表しており、第一の天使のメッセージでは「神を恐れ（清められる）、神に栄光を帰せよ（白くされる）。その裁きの時が来たからである（試される）」として表されている。これら三つの段階は「真理」であり、ヘブライ語のアルファベットの第一文字、第十三文字、最後の文字で表されている。そしてこれらの文字をその順に並べると、ヘブライ語の「真理」という語が作られる。

それら三つの段階が「道」である。というのも、詩篇77篇13節でアサフが述べているように、神の道は聖所にあり、その庭では、罪人は血を流すことによって清められる。その血はその後、聖なる所に携え入れられ、これは、聖化、すなわち『白くされる』という過程を表している。

すると、長老のひとりが答えて私に言った。「この白い衣をまとっている者たちは誰か。彼らはどこから来たのか。」私は彼に言った。「あなたをご存じです。」彼は私に言った。「彼らは大いなる患難から出てきた者たちで、小羊の血で自分たちの衣を洗い、白くしたのだ。」ヨハネの黙示録 7:13、14.

義認され、聖化された罪人は、そののち、至聖所に象徴される裁きにおいて「審理」されるための備えができる。イエスは「道」であり、「真理」であり、「いのち」である。「道」は始まり、「真理」は中ほど、「いのち」は終わりである。もし私たちが最初の段階で清められるなら、私たちは「道」にいることになる。すなわち、それは義認された者の道である。

しかし、正しい者の道は輝く光のようで、それは完全な日となるまでますます輝きを増す。箴言 4:18

第二の段階は、主の真理によってもたらされる義の現れである。なぜなら、御言葉は真理だからである。

彼らをあなたの真理によって聖めてください。あなたのみことばは真理です。ヨハネ 17:17.

第一の段階は義認された者を、第二の段階は聖化された者を表しています。最初の二つの段階は、義認され聖化された者が裁きに入り、永遠のいのちを受けるための備えとなります。イエスは道であり、真理であり、いのちです。

内なる義は、外に現れる義によって証しされる。内に義を持つ者は、冷酷で同情心に欠けているのではなく、日ごとにキリストの御姿に似る者へと成長し、力から力へと進んでいく。真理によって聖化されつつある者は自制し、恵みが栄光に変わるその時までキリストの足跡に従う。私たちが義認される義は帰算された義であり、私たちが聖化される義は与えられた義である。前者は天国に入る資格であり、後者は天国にふさわしくされる備えである。Review and Herald、1895年6月4日。

ヨハネによる福音書第14章から第17章にかけては、キリストが彼らを離れて御父のもとへ行かれるとき、弟子たちがどのように反応するかという問題が繰り返し取り上げられている。彼は戻って来ると約束し、（弟子たちは理解していなかったが）間もなく訪れる危機が深い失望を生むことを理解していた。これら四章には、聖霊が「慰め主」として示され、その定義が織り込まれている。ヨハネによる福音書では、聖霊は四度「慰め主」として言及され、第一ヨハネでも一度言及されるが、そこではその語は「弁護者」と訳されている。この語は新約聖書のほかのどこにも見られない。

旧約聖書では、「慰める者」と訳されるヘブライ語が、伝道者の書4章1節と哀歌1章9節、16節に見られる。これら三箇所はいずれも、圧制者が神の民を虐げ、彼らが味わう苦難と失望の中で彼らを支えてくれる「慰める者」がいなかったことを示している。

聖霊を「慰め主」と呼ぶのは、イエスが、数時間後に迫る大きな失望に備えるよう弟子たちを整えようとしている文脈の中で語られている。その文脈でイエスは、ご自身が不在であっても、聖霊が彼らに慰めを与えるために共にいてくださることを強調している。「慰め主」として聖霊を示すことによって、イエスは、その慰め主が成し遂げる働きの特徴を明らかにしている。

イエスがご自身の去ることと戻って来ることに繰り返し言及していることは、この箇所の主要テーマという観点から、その事柄を最上位に位置づけている。

ヨハネによる福音書14章2-4節、18節、19節、28節、16章5-7節、10節、28節、17章11-13節は、十人の乙女のたとえにおける遅れの時について直接言及している節である。前掲の節に加えて、以下の箇所は、繰り返しによって遅れの時を強調している。なぜなら、「主は重要でない事柄を繰り返されることはない」からである。

「しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなる。また、しばらくすると、あなたがたはわたしを見る。わたしが父のもとへ行くからである。」そこで弟子たちのうちの何人かが互いに言った。「彼が私たちに言うこの言葉はどういうことだろう。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなる。また、しばらくすると、あなたがたはわたしを見る』、また『わたしが父のもとへ行くからである』とは？」彼らはさらに言った。「彼が言う『しばらく』とは何のことだろう。彼の言っていることがわからない。」イエスは、彼らが自分に尋ねたいと思っているのを知って、彼らに言われた。「わたしが言った『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなる。また、しばらくすると、あなたがたはわたしを見る』ということについて、あなたがたは互いに問い合っているのか。まことに、まことに、あなたがたに言う。あなたがたは泣き、嘆くが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、あなたがたの悲しみは喜びに変わる。女が子を産むときは、その時が来たので苦しむ。しかし子を産み落とすと、ひとりの人が世

に生まれた喜びのために、その苦しみをもはや思い出さない。そのように今、あなたがたも悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたに会い、あなたがたの心は喜びに満たされ、その喜びをだれもあなたがたから取り去ることはできない。」ヨハネによる福音書 16:16-22.

第14章から第17章にかけて少なくとも21節が、弟子たちがキリストの戻って来られるのを待たなければならない期間を示している。その期間はキリストの死から始まり、主が御父のもとから戻って来られる時まで続く。彼らはその到来を待つ時は、十人の乙女のたとえにおける花婿の到来が遅れた期間を象徴している。ルカが記すエマオの弟子たちの場合と同様に、十字架による失望は、最初の失望に続く遅れの時の始まりを預言的に象徴している。

聖書の最初の書の冒頭の箇所には創造の物語が記されており、そこで天の三者を見い出すことができます。聖書の最後の書の冒頭の箇所にも、天の三者を見いだします。私たちが考察している四つの章の中にも、天の三者を見いだします。この事実を認識することによって、ヨハネの四つの章を、創世記1章1節から2章3節に至る預言的な流れおよび黙示録1章1節から11節に重ね合わせることができます。

その箇所でイエスはトマスに、だれでもイエスを見たなら、その人は父を見たのだと言われる。また、その箇所は、キリストがご自身の臨在によって弟子たちを慰めていたこと、しかし彼が去るときには「別の」「慰め主」を遣わすことを示している。聖霊はその慰め主であるが、キリストもまた慰め主であった。

もしあなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父も知っていたはずだ。そして今からは、あなたがたは父を知っており、また父を見たのである。フィリポがイエスに言った。「主よ、父をわたしたちにお示してください。それで十分です。」イエスは彼に言われた。「フィリポ、こんなに長い間あなたがたと一緒にいたのに、まだわたしを知らないのか。わたしを見た者は父を見たのだ。どうして『父をわたしたちにお示してください』と言うのか。」ヨハネによる福音書 14:7-9.

トマスは、アドベンティズムの中で、たとえ彼らとその真理を支持する証言をおそらく何度も読んできたにもかかわらず、天の三者の関係に関する証言を認めようとしぬ人々を代表している。

そして私は父に願い、父はあなたがたにもうひとりの助け主をお与えになる。それは、とこしえにあなたがたと共におられるためである。すなわち真理の御霊である。世はそれを見も知らないのを受け入れることができない。しかしあなたがたはそれを知っている。今それはあなたがたと共におり、やがてあなたがたのうちにおられるからである。私はあなたがたをみなしごにはしない。あなたがたのところに来る。もうしばらくすると、世はもう私を見なくなる。しかしあなたがたは私を見る。私が生きているから、あなたがたもまた生きる。ヨハネの福音書 14章16-19節。

もし私たちがイエスを見たなら、父を見たこととなります。イエスは「助け主」であり、聖霊は「もうひとりの助け主」です。もし私たちがイエスを見たなら、父を見たこととなり、助け主を見たことにもなります。聖書で「助け主」という語が用いられているのは五回で、そのすべてが使徒ヨハネによるものです。五つ目の箇所では、その語は「弁護者」

と訳されています。

わたしの子どもたちよ、あなたがたが罪を犯さないように、これらのことを書いています。もしだれかが罪を犯すなら、私たちには父のもとに弁護者がいます。義なるイエス・キリストです。ヨハネの第一の手紙 2章1節。

もし誰かが罪を犯すなら、私たちには慰め主、義なるイエス・キリストがいます。弁護者とは、罪人のためにとりなす者のことです。パウロは、イエスが私たちの弁護者であることを示しています。

誰が罪に定めるのか。死なれたのはキリストであり、いやむしろ、よみがえられ、神の右におられ、また私たちのためにとりなしておられる方である。ローマ人への手紙 8章34節。

イエスは罪人の弁護者であり、つまり彼は慰め主でもある。同じ章で、パウロは聖霊もまた私たちのためにとりなしてくださると既に述べている。

同様に、御霊もまた私たちの弱さを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきかを知りませんが、御霊ご自身が言い表すことのできないうめきをもって、私たちのためにとりなしてくださいます。人の心を探り極める方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神の御心に従って聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。ローマ人への手紙 8章26節、27節。

イエスと聖霊はともに「助け主」として示されており、したがって私たちのために取り成してくださる弁護者でもある。私たちが考察しているヨハネによる福音書の箇所には、天におられる三位がすべて現れており、これを聖書の最初の書の最初の証言と聖書の最後の書の最初の証言とを合わせて読むと、神格の三位の関係と働きに関する光はいつでも明らかにされる。

父なる神は、地上の事物によって言い表すことはできない。父なる神は、神性の満ち満ちたすべてを实体として備えておられ、死すべき者の目には見えない。御子は、神性の満ち満ちた全体の顕現である。神のことは、彼が「その位格の正確なかたち」であると宣言している。「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。すべて彼を信じる者が滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ここに父なる神の位格が示されている。

キリストが天に昇られたのちに遣わすと約束された慰め主は、神格の全き満ち満ちた御霊であり、自らの救い主としてキリストを受け入れ信じるすべての者に、神の恵みの力を顕してくださる。天には、生ける三つの位格がおられる。これら三つの御力-父と子と聖霊-の御名によって、生ける信仰によりキリストを受け入れる者はバプテスマを受け、これらの御力は、キリストにある新しい命を生きようと努める天に従順な者たちと協力してくださる。

罪人はどうすべきか。-キリストを信じなさい。人はキリストのもの、神の御子の血によって買い取られた者である。試しと試練を通して、救い主は人間を罪の奴隷状態から贖い出された。では、罪から救われるために私たちは何をすべきか。-罪を赦す救い主である主イエス・キリストを信じなさい。自分の罪を告白し、心をへりくだらせる

者は赦しを受ける。イエスは、無限の神の独り子であると同時に、罪を赦す救い主である。赦された罪人は、罪からの救い主であるイエス・キリストによって神と和解する。聖なる道にとどまり続けるなら、彼は神の恵みの下にある者となる。彼には、完全な救いと喜びと平安、そして神から来るまことの知恵がもたらされる。

イエス・キリストの贖いの血への信仰は、赦しの確信である。キリストはすべての罪を洗い清めることができる。日々その力にただ寄り頼むことは、この終わりの時代に魂を罪の束縛から守るものが何であるかを見分ける鋭い知恵を人に与える。信仰と祈りによって、キリストを知ることを通して、彼は自分の救いを達成すべきである。

聖霊はすべての真理を見極め、私たちをその真理へと導いてくださる。神は、その独り子をお与えになった。御子を信じる者はだれでも、滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。キリストは罪人の救い主である。キリストの死は罪人を贖った。これが私たちの唯一の希望である。もし私たちが自己を完全に明け渡し、キリストの徳を実践するなら、永遠のいのちという報いを得るであろう。

「御子を信じる者は、御父をも持っている。」御父と御子を絶えず信じる者は、聖霊も持っている。聖霊はその人の慰め主であり、その人は決して真理から離れない。バイブル・トレーニング・スクール、1906年3月1日。

天の三者の働きと関係についてのさらなる光に加えて、この箇所では天の三者が特定されていることは、これらの四章が、ユダの部族の獅子によって今まさに封印が解かれているメッセージと一致させるべきであることの証しとなっている。

エマオの弟子たちの物語における証しは、十字架の後に続いた失望と待機の期間が、第一の失望の後に続く失望と待機の期間を表していることを明らかにする三つの証言を示している。さらに、ヨハネの四つの章に描かれている歴史が第一の失望の状況を表していることを支持する、別の証しもある。

神の言葉において最初に示される真理である創造物語の最後の節は三つの語で終わっており、そのそれぞれの語は「truth」という語を形作る三つの文字のいずれかで始まり、しかも正しい順序になっている。創世記の創造物語は「In the beginning」という語で始まり、「God created and made.」という三つの語で終わる。

それら三つの語の頭文字を合わせると、「真理」という語になる。創造物語は「初め」から始まり、アルファとオメガを表す文字で象徴される語で終わる。同様に、聖書の最後の書の冒頭箇所では、イエスは二度、アルファとオメガ、初めと終わり、最初と最後であると明言されている。アルファとオメガを表すその三つの文字は、ヨハネによる福音書の箇所が、創世記冒頭の預言的記述と黙示録冒頭の預言的記述と結び合わされるべきであることを示す、さらに別の証しとなっている。その証しは、慰め主の働きの記述の中にも認められる。慰め主の働きは、同じ三つのヘブライ文字で表される三段階の働きである。アルファとオメガのしるしは、これら四章を、救いの猶予期間が閉じられる直前に封印が解かれるイエス・キリストの黙示のメッセージの文脈に位置づけることを可能にする。

七つの雷鳴は、四つの特定の道標（時点）と、地をその栄光で照らす天使の降臨という道標から始まる三つの特定の期間を表している。その道標は一つの時点であった。第二の

道標（時点）は第一の失望であり、それが「遅延の時」という期間の幕開けとなる。遅延の時は第三の道標（時点）へと至り、そこで一つの真理の封印が解かれ、それが運動を生み出す。その運動は、裁きとして表される第四の道標（時点）で終結する。これら四つの道標と三つの期間は、それぞれが一つの雷鳴を表し、合わせて七つの雷鳴となる。また、それらは四と三の組み合わせも表している。

これまでの記事で、七つの教会、七つの封印、七つのラッパに関する先駆者たちの理解が「四と三の組み合わせ」を認めていることを明らかにしてきました。最初の四つの教会・封印・ラッパは、最後の三つの教会・封印・ラッパとは区別されます。七つの雷は四つの道標を表していますが、その四つの道標の中には三つの時期があります。黙示録における「四と三」の神的な組み合わせは、三つの証人（教会・封印・ラッパ）によって確立されており、これらの証人は、黙示録の七つの雷における「四と三」の組み合わせの正当性を証言しています。

それでもなお、七つの雷によって表される歴史の流れの内には、七つの雷という象徴で表されているものとは異なる三つの道標を備えた、もう一つの隠された独自の預言の筋道が内在している。したがって、いま封印が解かれつつある隠された歴史と七つの雷との預言的關係を考えると、七つの雷は四つの道標（時点）を示し、隠された歴史は三つの道標（時点）を示していることがわかる。七つの教会、七つの封印、七つのラッパ、七つの雷と同様に、隠された歴史は、七つの雷の四つの道標と結びついた三つの道標を表している。隠された歴史はまた、三と四の組み合わせも備えている。

七つの雷のうちに埋め込まれた隠された歴史には、それぞれが「時点」である三つの明確な道しるべがあり、その三つの道しるべの最初と最後は失望を表している。第一と第二の道しるべの間には明確な「期間」があり、第二と第三の時点の間にも明確な「期間」がある。「disappointment」という語は、約束を守れなかったという概念から発展し、その定義には時点の強調が含まれている。真夜中もまた特定の時刻である。隠された歴史は、二つの期間（「遅延の時」と「第七の月の運動」）によって区切られた三つの時点によって示されている。

隠された歴史の最初の道標は失望を示しており、最後の道標もまた失望を示している。ゆえに、最初の失望から最後の失望に至るまでには、すべての改革線と同じ三つの段階を備えた隠れた預言の線が存在する。またそれはアルファとオメガのしるしをも帯びている。というのも、「真理」という語を形作る三つの文字が、失望で始まり失望で終わる三つの道標に対応しているからである。七つの雷のうちにあるその隠された歴史こそ、ユダ族の獅子がいま封印を解いておられる真理である。

私たちが考察しているヨハネの箇所は、前章の最後の晩餐によって導入されており、この四章にわたるメッセージは食べるべきものであることが強調されている。これら四章は、ゲツセマネへ向かう歩みの場面で終わる。物語は、食事から十字架の危機が始まるまでの流れの中で展開する。預言的に見ると、この四章の設定は、裁きの前に食べるべき最後のメッセージを示している。裁きの終結へと導くメッセージは、その終結の直前に黙示録で封印が解かれるメッセージである。

弟子たちとイエスは、預言的歴史において、遅延の時を知らされる時点にいる。ミラー派の歴史では、主は御手を取り去って「真夜中の叫び」のメッセージの理解が生まれるようにされたが、サミュエル・スノーのメッセージを生み出したその理解は、ミラー派に、彼らが十人の乙女の遅延の時の中にも知らせた。弟子たちはちょうど最後の晩餐を終えたばかりで、そのメッセージを咀嚼している間に、キリストはヨハネによる福音書の四つの章にわたって遅延の時を説明された。

サミュエル・スノーの理解は一連の記事として記録することができ、それは「真夜中の叫び」のメッセージとして表された最終的な理解へと発展していった。彼のメッセージが発展していく中で、彼は一連のキャンプ集会でもそのメッセージを発表した。キャンプ集会へとつながる一連の記事は、最終的に彼を6日間続いたエクセターのキャンプ集会へと導いた。預言的に見ると、「真夜中の叫び」のメッセージは一定の期間を経て段階的に発展していく。ヨハネによる福音書の四つの章は、そのメッセージが発展している預言史の段階で起こる出来事である。

ヨハネの四つの章では、聖霊の働きは三つの段階として定義されている。すなわち、罪を悟らせること、義、そしてさばきである。これら三つの段階はまた、七つの雷のうちに埋め込まれた隠された歴史の三つの道しるべでもある。

しかし、私はあなたがたに真実を言う。私が去って行くことは、あなたがたにとって益である。私が去って行かなければ、助け主はあなたがたのもとに来ない。しかし私が去って行けば、私は彼をあなたがたのもとに遣わす。彼が来ると、罪と義とさばきについて、世にその誤りを明らかにする。罪については、彼らが私を信じないからである。義については、私が父のもとに行き、あなたがたはもはや私を見ないからである。さばきについては、この世の君がさばかれたからである。まだあなたがたに言うべきことが多くあるが、今はそれに耐えられない。しかし、真理の御霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真理へと導く。彼は自分から語るのではなく、聞いたことを語り、やがて起こることをあなたがたに知らせる。彼は私の栄光を現す。彼は私のものを受け、それをあなたがたに知らせるからである。ヨハネによる福音書 16章7-14節。

ミラー派の歴史において、イエスは真夜中の叫びの時に、遅延の時期を終わらせるために再臨することはなかった。彼は御手を離し、聖霊を注ぎ、あるいは遣わした。慰め主として表される聖霊は、失望を払拭するために来られた。聖霊は、選ばれていながら、成就しなかった予言による失望に当惑していた人々に慰めを与えるために来られた。

これまでに指摘してきたように、使徒ヨハネ、エゼキエル、そしてエレミヤはいずれも、口にすると蜂蜜のように甘い小さな巻物を食べる姿として描かれている。これら三人の預言者の間には、しばしば見落とされる意図的な区別がある。

エゼキエルは、小さな巻物を食べ、神に背いた教会に伝えるべきメッセージを与えられた者たちを象徴するために用いられている。彼は、食べたその巻物が、その後成し遂げられるべき働きを指し示すことを表している。彼は、かつて神に選ばれた民に与えられるメッセージを象徴している。彼のメッセージは、かつて神に選ばれた民を、火に定められた束にまとめるものである。ヨハネの四つの章において、イエスはエゼキエルの働きの目的を明らかにしている。

私があなたがたに言った言葉を思い起こしなさい。「しもべはその主人にまさるものではない。」彼らがわたしを迫害したなら、彼らはあなたがたもまた迫害するであろう。もし彼らがわたしの言葉を守ったなら、彼らはあなたがたの言葉も守るであろう。しかし彼らがあなたがたにこれらすべてのことをするのは、わたしの名のゆえであって、わたしを遣わされた方を彼らが知らないからである。もしわたしが来て彼らに語らなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。しかし今や、彼らには自分の罪について弁解の余地がない。わたしを憎む者は、わたしの父をも憎む。もしわたしが彼らの中で、ほかの誰も行わなかったわざを行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。しかし今や、彼らはそのわざを見て、わたしとわたしの父をともに憎んだ。しかし、彼らの律法に書かれている「彼らは理由もなくわたしを憎んだ」という言葉が成就するために、このことが起こったのである。しかし、助け主が来るとき、すなわち、わたしが父のもとからあなたがたに遣わす真理の御霊、父から出るその方が、わたしについて証しするであろう。ヨハネ 15:20-26。

彼が書を食べたときに始まったエゼキエルの務めは、拒絶されるメッセージの提示を象徴している。しかし、その拒絶こそが、彼らが神を憎み、猶予の時の杯を完全に満たしてしまったことの証拠である。

そして私に言われた。「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの子ら、すなわちわたしに背き反逆している国民のもとへ遣わす。彼らもその先祖たちも、今日に至るまでわたしに背いてきた。彼らは厚かましく、心のかたくなな子らである。わたしはあなたを彼らのもとへ遣わす。あなたは彼らにこう言え、『主なる神はこう言われる』と。彼らが聞き入れようと拒もうと（彼らは反逆の家だから）、彼らは自分たちの中に預言者がいたことを必ず知ることになる。」エゼキエル書 2章3-5節

エゼキエルの働きは、古い契約の民に対する告発の証人としてのものであり、それは、つまらぬ論争をふっかけるユダヤ人に対するキリストの在り方と同様であった。ゆえに、エゼキエルのメッセージは、古い契約の民を毒麦として束に束ね、滅びの火に定める最後の警告のメッセージである。

そのとき、私は第三の天使を見た。私に同行していた天使が言った。「恐るべきは彼の働き、畏るべきは彼の使命である。彼は、麦を毒麦から選び分け、天の穀倉のためにその麦に印を押し、あるいは束ねる天使である。これらの事柄は、心も注意もすべてを占めるべきである。」『初期の著作』118頁。

小さな巻物を食べることによって表される働きは、力ある御使いが手に小さな巻物を携えて降りて来るときに始まる。これは、第一の天使の歴史においては1840年8月11日に、第三の天使の歴史においては2001年9月11日に起こった。これら二つの日付は、それぞれ第二のわざわいのイスラム、第三のわざわいのイスラムに関連する預言の成就を表している。ゆえにイザヤは二十二章で、フィラデルフィア人とラオデキヤ人のための「幻の谷」における危機を描写する際、1840年にはプロテスタントの選民であり、2001年には選民であったアドベンチストであるラオデキヤ人が「弓を射る者たちに縛られた」と指摘している。聖書預言における弓を射る者とはイスラムであり、1840年と2001年にイスラムに関する幻が成就したとき、かつての選民たちは、エゼキエルに象徴される人々によって提示されたイスラムの預言を退けた。その時その場で、彼らは毒麦として束ねられた。

エゼキエルの働きは、彼らの「罪」を覆っている「衣」を取り除くことであり、それはイエスによって「神への憎しみ」として表されている。

幻の谷についての託宣。今、お前はどうかしたのか。なぜ皆が屋上に上っているのか。騒ぎに満ちた都、騒乱の都、喜びの都よ。お前の殺された者たちは剣で殺されたのではなく、戦いで死んだのでもない。お前の支配者たちは皆、いっせいに逃げ去ったが、弓兵に縛られた。お前のうちで見いだされた者は、遠くへ逃れた者たちでさえ、皆ともに縛られた。イザヤ書 22:1-3

そして、神はその少年 [イシュマエル] と共におられた。彼は成長し、荒野に住み、弓の射手となった。創世記 21:20.

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18.

エレミヤは、力ある御使いがその栄光によって地を照らすために降りてきたときに書を食べた者たち、すなわち1843年の予言の不成就による失望を経験した人々を代表している。エレミヤは、神が偽られたのではないかと預言的に考察する。その言及は、エレミヤをハバクク書2章と結びつける。

私は見張り所に立ち、やぐらに身を置いて、彼が私に何を語られるか、また私が咎められるとき何と答えるべきかを見ようと見張る。主は私に答えて言われた。「幻を書き、これを板に明瞭に記せ。読む者が走りながらでも読めるように。というのは、この幻はなお定められた時のため、終わりには必ず語り、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ、高ぶる者の魂は彼のうちにまっすぐではない。しかし、義人はその信仰によって生きる。」ハバクク書 2:1-4.

ジョンは、甘さと苦い失望を経験した人々を象徴するために用いられ、1840年8月11日から1844年10月22日に至るまでの歴史全体を表していた。

そして私は天使のところへ行き、彼に言った。「その小さな巻物をください。」すると彼は私に言った。「取って食べなさい。それはあなたの腹を苦くするが、口には蜂蜜のように甘いであろう。」そこで私は天使の手から小さな巻物を取って、それを食べた。すると、それは私の口には蜂蜜のように甘かったが、食べ終わるとすぐに、私の腹は苦くなった。黙示録 10:9, 10.

エゼキエルは、1840年8月11日と2001年9月11日に天使が降臨したときに始まった、かつての選民を締めくくる預言的メッセージを伝える働きを表している。

「しかし、人の子よ、わたしの言うことを聞け。あの反逆の家のように背くな。口を開け、わたしが与えるものを食べよ。」わたしが見ると、見よ、一つの手がわたしのもとに送られてきて、その中に巻物があった。それはわたしの前に広げられ、それには内側にも外側にも書かれており、そこには嘆きと悲しみと災いが書かれていた。さらに彼はわたしに言った、「人の子よ、見つけたものを食べよ。この巻物を食べ、イスラエルの家に行って語れ。」

そこでわたしは口を開け、彼はその巻物をわたしに食べさせた。そして彼はわたしに言った、「人の子よ、それを腹に入れ、わたしがあなたに与えるこの巻物で、はらわ

たを満たせ。」

そこでわたしはそれを食べた。するとそれは口の中で蜜のように甘かった。

エゼキエル書 2:8-3:3

エレミヤは、1840年8月11日から真夜中の叫びの直前に至るまでの歴史を象徴している。

あなたの御言葉を見だし、私はそれを食べた。あなたの御言葉は私にとって、心の喜び、楽しみとなった。万軍の主なる神よ、私はあなたの名によって呼ばれているからだ。私はあざける者の集いに座らず、喜びもしなかった。あなたの御手のゆえに、私はひとり座った。あなたが私を憤りで満たされたからだ。なぜ私の痛みは絶えず、私の傷は治ることを拒む不治のものなのか。あなたは全く私にとって偽り者のように、涸れ果てる水のようになられるのか。ゆえに、主はこう仰せられる。「もしあなたが立ち返るなら、わたしはあなたを再び連れ戻し、あなたはわたしの前に立つであろう。もし卑しいものの中から尊いものを取り分けるなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らをあなたのもとに帰らせよ。だが、あなたは彼らのもとに帰ってはならない。わたしはこの民に対して、あなたを堅固な青銅の城壁とする。彼らはあなたに向かって戦うが、あなたに打ち勝つことはできない。わたしがあなたとともにいて、あなたを救い、あなたを助け出すからだ」と主は仰せられる。「わたしは悪しき者の手からあなたを救い出し、恐るべき者の手からあなたを贖い出す。」エレミヤ書 15:16-21

エレミヤは、私たちの現在の歴史とメッセージを表しています。現在のメッセージは「真夜中の叫び」のメッセージであり、エレミヤによって表される神の民が「憤り」で「満たされ」、自分たちの「痛み」は「いつまでも続く」ものであり、「傷は癒しがたい」-決して癒されることのない傷-のだと考えていた時点で、次第に展開しているものです。彼らは「あざける者の会衆」から離れました。彼らはもはや、最初にその書を食べ、それが彼らの「心の」「喜び」であったときのように「喜ぶ」ことはありません。

しかし、そのような状態にある者たちには勧めがある。「もし汝が立ち帰るなら」、また「卑しきものの中から尊いものを取り分けるなら」、そのとき神は彼らに立ち返られる。ヘブライ語の当該箇所「私はあなたを再び連れ戻すであろう」は、彼らが神に立ち帰るなら、神が彼らに立ち返られる、という意味である。

それゆえ、神に従いなさい。悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去る。神に近づきなさい。そうすれば、神もあなたがたに近づいてくださる。手を清めなさい、罪人たちよ。心を清めなさい、二心の者たちよ。苦しみ、嘆き、泣きなさい。あなたがたの笑いを嘆きに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださる。ヤコブの手紙 4:7-10。

もし彼らが神に近づくなら、神も彼らに近づかれる。もし彼らがこれらのことを行うなら、彼らは主の「御前に立ち」、神の「口」となる。さらに彼は、エレミヤ（私たち）に、「『悪しき者』に対してご自分の民を『守り固められた青銅の城壁』とし、その後『恐るべき者たち』がエレミヤによって代表される者たちに戦いを仕掛けるようになる」と教える。「悪しき者」とは、マタイの愚かな乙女たちをダニエルが表した呼称である。「恐るべき者」は、日曜法の危機における現代バビロンの三重の連合を表している。

三人の預言者の証言はいずれも同じ歴史を扱っているが、その歴史の異なる三つの側面にそれぞれ焦点を当てている。エレミヤは、最初の失望を経験したばかりで、まだ真夜中の叫びの道標に到達していない人々を表している。私たちは2020年7月18日以来、この地点にいる。問題は、私たちが立ち返るかどうかである。もしそうするなら、アメリカ合衆国が「竜のように語る」まさにその時に、私たちは「主のために語る」ことになる。

エレミヤが示している歴史は、私たちの現在の歴史であり、七つの雷鳴のうちに隠された三つの道標によって表されている歴史でもある。また、それはヨハネの箇所が預言的に設定されている歴史でもある。というのも、ヨハネの四つの章の焦点は、偽りを信じてしまったのではないか、また、あれほど甘く味わわれたメッセージが実は尽きる水だったのではないかと自問するエレミヤを慰める聖霊の働きに置かれているからである。

したがってエレミヤは、2001年9月11日から、遅延の時が始まった2020年7月18日までの歴史を表している。その遅延の時は、象徴的な三日半として表されている。ここで「象徴的」と言うのは、時の予言を指しているのではない。私が言っているのは、2020年7月18日こそ、黙示録11章にある二人の証人、すなわち聖書と預言の霊が殺され、その死体が三日半の間通りに放置された時だということだ。

わたしはわたしの二人の証人に力を与える。彼らは荒布をまとい、千二百六十日のあいだ預言する。彼らは地の主なる神の御前に立つ二本のオリーブの木、すなわち二つの燭台である。もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を焼き尽くす。彼らに害を加えようとする者は、このようにして殺されることになる。彼らには天を閉じて、彼らが預言している期間中は雨が降らないようにする力があり、また水を血に変え、望むたびにあらゆる災いで地を打つ力を持っている。彼らはその証しを終えると、底知れぬ淵から上ってくる獣が彼らに戦いを挑み、彼らに打ち勝って、彼らを殺す。彼らの死体は、大なる都の大通りにさらされる。その都は霊的にはソドムまたエジプトと呼ばれ、そこでわたしたちの主も十字架につけられた。諸民、諸族、諸言語、諸国の人々は、彼らの死体を三日半のあいだ見て、彼らの死体を墓に葬ることを許さない。地に住む者たちは彼らのことで喜び楽しみ、互いに贈り物を送り合う。これは、この二人の預言者が地に住む者たちを苦しめたからである。黙示録 11:3-10。

エレミヤの状態が示す証しは、失望の後、しかし真夜中の叫びの前に位置しています。エレミヤは、真夜中の叫びのメッセージの声となる前に、戻る必要がありました。これは今日の私たちの状態です。これはまた、私たちが考察しているヨハネの四つの章の歴史的背景でもあり、七つの雷の中に秘められた歴史によって表されている歴史でもあります。

ヨハネの四章にわたる証言において「慰め主」に結びつく光を考えるなら、その物語が2020年7月18日、失望と遅延の時、封印が解かれた真夜中の叫びのメッセージ、そしてやがて来る日曜法の裁きについてのものであることを認識するに足る豊富な証拠が見いだされる。これらの章は、隠された歴史の予言的構造の上に築かれている。

間もなく来る危機において私たちが神の口として語る者となるためには、今私たちのなすべき務めは「卑しきものの中から尊いものを取り出す」ことである。あるいは、同じ務

めをヤコブが述べているように、私たちはこうすべきである——「罪人たちよ、あなたがたの手を清めよ。二心の者たちよ、あなたがたの心を清めよ。悩み、嘆き、泣け。笑いを嘆きに、喜びを憂いに変えよ。主の御前にへりくだれ。そうすれば主はあなたがたを高くしてくださる」。ごく近い将来、あなたがたを旗印として高く掲げてくださる。

彼は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追いやられた者を集め、ユダの散らされた者を地の四隅から集める。イザヤ書11章12節。

これら四章の考察は次回の記事で締めくくります。